

“白”というコンセプト

「白」と「半透明」

原 グラフィックデザイナーとしての僕の仕事は、物そのものを作るというよりも、コトを作っている。つまり、世の中や人の頭の中に対して何か特別な結び目を作ることだと思っています。ポスターや新聞広告、パッケージデザインそのものは、言わばコトの痕跡のようなものです。目に見えるものを扱いつつ、どうすれば人の記憶や意識の中にくっきりとコトが屹立させられるか。そういうことを考えながら、仕事をしています。今回のテーマは「白」ということですが、僕がデザイナーとして扱ってきた「白」は、色そのものではなく、コンセプトであると言えます。



谷崎潤一郎は80年ほど前に『陰翳礼讃』という本を書いています。彼は陰翳の中に美意識を描く透視図のひとつの消失点を見つけているように思います。そして、陰翳と人間の感じ方を軸にした感受性を本の中で展開しているのですが、僕はそれを読むほどに、もうひとつ別の興味や湧き上がってくるのを抑えられません。つまり、谷崎潤一郎が発見した「陰翳」とは逆のところにも、もうひとつ美意識の消失点があると感じているのです。それが「白」ではないかと思っています。「白」は色の問題ではなく、コンセプトのようなものです。庭や空間、書物や音楽、舞踏など、さまざまな表現の背景を探っていくと、白に関係する

同じコンセプトがあることがわかってきます。僕たちは「白」に託された、あるはっきりとした傾向を読み取ることができるんです。

野に咲く花はとても白いけれども、後ろにコピー用紙を置いてみると、たいていは紙のほうが白いです。しかし白い花の印象はコピー用紙よりずっと白い。それは花が物理的に白いのではなく、「白い」と感じる感受性が作用している。

青木さんの建築も、僕の中では白い印象があります。実際に色としては白くないのかもしれませんが、印象として白い、ということがとても重要な意味を持っている。その背景にはどんな気持ちがあるのでしょうか。

青木 「陰翳礼讃」の語でいえば、その陰というのはどちらかというと黒に近いもの。でも、谷崎が言っているのはグラデーションがある陰で、たとえば漆黒に見えたとしても、そこには必ず透明感があります。そういう意味では、黒という色は非常に透明な色で、明るい色の中でも少しだけ暗さを作ることができる存在です。ところが、白は全く正反対。非常に不透明で、奥行きが感じられない。色彩の中で最も厚みを持たず、表面だけにありながらも非常に強い何かがある色だと感じています。でも、非常に不透明であるにも関わらず、ある種の透明感を感じさせるといふ矛盾も可能なのが白の魅力です。その透明度と一緒に考えて、透明度の度合いというものを考えると、無限のことができるものだと僕は考えています。

例えば、病院からイメージする白というのは、無菌状態というか、清潔すぎて非人間的な意味を持っています。それがウェディングドレスに置き換えると、その白は無垢や純粋など、優しさを持つ色になる。つまり、一つの「白」が正反対の意味を持ち得るわけですが、それは、白が持つ透明度による違いなのか、と思っています。

僕が最初に白を使ったのは、白で「半透明な



原田公誠本社にて

感じが表現できないかと思ったのがきっかけでした。僕にとっての半透明は、全体に霧が立ち込めていて、明るかったり暗かったりする空間。それは不透明ではなく、「半透明な白」なんです。その感覚を物体で表現できないだろうかと思いました。そこに至った白というのは、色ではなく体験ですね。感じることを違う方法で再現したいという興味から生まれたわけです。

白に対して「してかしてしまう」ことの怖さ

蜂飼 「白」という単語だけを取り上げて考える機会はありませんが、私が思うこと

の一つは、ものを書く上で、白は体験として重要な意味を持っているということです。ものを書くということは、ゼロから出発し、言葉の一つ一つ組み立てていく行為です。何もなかったところからスタートして目の前に何かを出現させるとき、受けとめる存在としての白が必要になると思います。個人的な話になりますが、私は詩を書くときにはまず、紙に書くんです。以前は真っ白な紙に詩を書いてたんですが、あるとき突然、白い紙に書くのが怖くなったことがありました。真っ白な紙に最初の一字を書くということが、どうしても生理的にできなくなって、ちょっと

汚れている紙や、何かの裏紙にしか書けなくなった時期がありました。恐怖感というわけですが、真っ白な場所だと、どうしても一歩踏み出せない、そんな状態になったという体験がありました。

原 今は紙はメディアと呼ばれていて、プリンタブルな側面が注目されがちですが、僕は紙の本来の価値は「白さ」と「ハリ」にあると思っています。白は汚れやすいし、ハリがあるということはすぐにしなってしまふことと隣り合わせですから、非常に「こわれやすい」存在です。その繊細な白に墨で黒々と書く。もう、取り返しのつかない